

戦争を知らない世代へ 43 和歌山編

私の中の戦場

大陸中国に生きて

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ㊤和歌山編

私の中の戦場——大陸中国に生きて

昭和53年10月25日 初版第1刷発行

編者◎ 創価学会青年部反戦出版委員会

発行者 栗生一郎

発行所 株式会社 第三文明社

郵便番号 101 東京都千代田区猿楽町2-5-4

振替 東京5—117823 電話03 (294) 8731(代)

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 株式会社 星共社

1978 Printed in Japan

0036—7043—4438

落丁・乱丁本はお取り換え致します

定価 1100円

戦争を知らない世代へ ④3 和歌山編

私の中の戦場

大陸中国に生きて

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

発刊の辞

戦争の最大の犠牲者は民衆である——はじめにこの事を明確にしておきたい。これが、本書のテーマでもあるからだ。

我々は、軍国主義国家の雰囲気知らない。しかし、我々の周辺には、軍国主義のなんたるかを五体に刻みこんだ民衆が半数もいる。彼等から伝え聞く軍隊の仕組みは、我々に、完ぺきに官僚化された組織のイメージを与える。下士官の語る軍隊と、一兵士の語る軍隊との間には越え難い溝があることも事実である——重ねて言うなら、この「越え難い溝」を生み落としたことこそ官僚化された組織といわれるゆえんである。人類史上、軍隊ほど官僚化された組織は、他に類例を見ないというのが我々の確信である。

このことは、とりわけ、戦場における民衆のうえに象徴的に現われ、戦場に生きた民衆ほど悲惨なものではなかった。たとえば、それが軍靴の音高鳴る凱旋がいせんのなかにあっても、戦場における一兵士ほど悲惨なものはない——この点については、前編「中国大陸の日本兵」が如実にようじつに物語ってい

るところである。

本書に、フィリップスのロハス元大統領を救出した「人情大隊長」のことが描かれている。彼は、時に応じ機に臨み、自身の人間性に基づいて、戦争に対する否定的な行動を貫いている。これは、見方によっては、戦場における戦争批判として、我々は最大の賛辞を送りたいという気持ちになる。たしかに、当時の状況を把握するなら絶賛に価する生涯であった。しかし、今一つ、我々自身の内に割り切れないものが残るのはなぜか。それは、彼が「大隊長」という絶対的な権限を持っていたから可能な行動ではなかったか？ 一兵士に彼のような行動は不可能であったに違いない！ そんな気持ちをもぐいさることができないからである。一步ゆずって「人情大隊長」を賛嘆したとしても、戦争の犠牲者が民衆であることになんら変わりはない。我々は、この事実から視点をはずすわけにはいかないのである。

今も、この地上で戦火はくすぶり、燃え上がっている。そして、いつの場合もそれは民族と民族の闘争にすりかえられ、民衆の生命を贖ってその犠牲のうえに行使されているのである。我々の耳には、あの重戦車の下から軋むような民衆の悲痛な叫びが聞こえてくる。その声は、我々が民衆そのものであるからこそ聞きとることのできる真実の「反戦」の叫びではないだろうか――。本書に収められた手記もまた真実の民衆の叫びである。

我々創価学会青年部は、いつ、いかなる場合にも「民衆の側に立ち、民衆とともに歩む」こと

を前提に「反戦・平和」の旗を振り続ける。ここには、かつては日本軍の将兵として、その身を戦場にさらした人々もいる。個人的なあらゆる経験、あらゆる境遇を越えて、この地上に「反戦・平和」の不壊の砦を構築しようと、集まった『民衆の大地』である。

最後に本書の編集に労をいとわず、昼夜をわかたぬ活動をしてくれた反戦出版委員会のメンバーに心から感謝する次第である。

昭和五十三年十月

創価学会青年部

和歌山県男子部長 森岡晴男

目次

発刊の辞

第一章 戦火の中

兵士の死と母……………大林幸子 11

「常德作戦」の顛末……………堀内圭一 20

神保大隊長を偲ぶ……………上田巡次 31

初年兵……………中村高雄 42

敦化陸軍病院……………中橋久磨二 56

泥と汗の行軍……………辻久男 70

私的制裁……………大林清 78

原生林踏破……………長谷秋男 88

日めくりの記……………畑中圭三 98

第二章 終戦前後

横浜第八軍軍事裁判……………池田昌平 121

孤独な戦い……………宮下昭三 140

「共の会」……………	井本泰朗	150
村上少佐の一言……………	城山正明	159
洗脳教育……………	山田好一	169
明暗の分岐点……………	山路龍一	181
修羅の群れ……………	高井謙二郎	191
重戦車の下に……………	中崎広彦	214
帰還兵……………	滝正一	224
あとがき……………		

第一章 戦火の中

兵士の死と母



大林 幸子（54歳）

元救護看護婦。昭和十六年十月、救護班要員。十七年三月、華北「石門陸軍病院」勤務。その後「天津陸軍病院」「病院船」「朝鮮軍臨時兵站病院」勤務。十九年五月、救護班召集解除。

華北「朝鮮軍臨時兵站病院」の一病棟——（い）剽輕な兵士のなかにあつて、張りつめた表情をほとんど崩さず、いつまでも深い沈黙を守り続ける兵士が幾人かいました。かれらの多くは、手足を完全に失っていたり、両眼失明という重傷患者でありました。

当時にあつて、「戦傷は戦死に次ぐ名誉である」とされていました。そうはいっても、それらの兵士を目のあたりにしている私達救護看護婦に、どうして「名誉の負傷」などという見方ができたでしょうか。少なくとも私には、かれらの姿を「名誉」の称号などで片付けることはできま

せんでした。ただでさえかれらのいる病室は、私達看護婦でも語りかける言葉に窮してしまうほど、緊迫した空気に包まれていたからでした。今だから思えるのかもかもしれませんが、かれら重傷患者は愚痴も言わずに、ただ厳然たる沈黙をもって、「名誉の負傷」に抗議していたのではないのでしょうか。

そういう重傷患者のなかに、両眼失明で応急手当を済ませたばかりの真新しい包帯も痛々しい、一人の青年がいました。かれは、早稲田大学から学徒出陣してきていたのです。詳しい事情は、何一つ聞かされていませんでしたが、ほどなく内地へ送られることになっていたのでした。しかし、御両親（大陸におられたと思う）は、彼の安否を一刻も早く知りたいと思われたのでしょうか、御夫妻連れ立って、「朝鮮軍臨時兵站病院」に駆けつけられたのです。

『どんな姿になっているのだろうか。命さえ無事ならいい。私たちの息子だもの、命さえあれば、後は私たちがどんなに苦労しても守り育ててあげられる』とこの病院への道すがら、幾度となく御夫妻は我と我が身を励ましたことか、容易に想像できるのです。

病室に入るなり、母親はめごとく息子を確認し、無言のままつかつかと一筋に歩み寄り、立ち尽くす息子の肩をひしと抱きしめました。その手で、やはり何も語らず、息子の背をやさしくいたわるようにさすっておりました。父親は近寄ることも忘れて、その母子の姿を静かに見守っているだけでした。母に抱かれた息子は、深い兵士であつたのでしょうか、グッと齒を食いしばり直

立不動の姿勢で、「何か」に耐えているようでした。母の愛情に甘え切って、その胸で泣き崩れてしまいたかったに違いありませんが、それを潔しとしなかったのではないのでしょうか。母も余程気丈な方なのか、涙さえ見せることなく黙って息子の背をさすっておりました。その胸の内では（オマエ！　なんという姿になってしまったのか、可哀想に、可哀想に……）と泣き叫んでいるに違いありません。辺り一面には深い悲しみが漂っておりました。

そうした悲しみの涙も涸れる間もなく、第一線で大きな作戦が開始されると、このような重傷患者が続々と飛行機で運び込まれてくるのでした。私が「日本赤十字社甲種看護婦養成所」を繰り上げ卒業になり救護看護婦として「石門陸軍病院」に派遣されたその日も、大変な数の負傷兵が運び込まれてきました。内地では想像もできない修羅場にいきなり出食わして、張りつめた気持ちでキビキビと行動していたことを覚えています。どんな戦闘が行なわれているのか知りませんでした。夜となく昼となく負傷兵が運ばれ、病室に収容しきれなくなると、廊下にまで溢れるほどでした。治療も迫いつかず、手当てを受けずに亡くなられた兵士が何人もおりました。

治療可能な負傷兵といっても、実際は手のつけられない惨憺たる状態の患者ばかりでした。そうでなければ、もとよりこの病院へは運び込まれないのでしょうか……。ある兵士は迫撃砲でやられたのか、手が摩滅して腫れあがっている傷口から、丸々と太ったウジ虫がボトボトと落ちてくるのです。両眼失明、破傷風悪化、大腿部貫通銃創、爆傷で全身血みどろ、どの兵士も目を覆

うばかりでした。

私達がある負傷兵を手当てしようと思って、ズボンに手をかけた途端、その負傷兵の腹の中へズブッと手がめり込んでしまうのです。ハッとして手を引き抜くと、ウジ虫がおなかにビッシリと詰まっているのでした。初めの頃は、同僚の救護看護婦が卒倒するほどでした。私も悪寒が走り、体が震えたものでした。

「石門陸軍病院」は、兵站病院（戦場の後方にある病院）で、一号館から五号館までありましたが、一つの病棟に百十人程の患者を収容しておりました。そのうち重傷といわれる患者は、各病棟に一割強おりましたが、夜間の救護看護婦は一病棟に二人配置されているだけでした。二人で百十人の患者を看るのですから、それは目の回る忙しさで、毎日毎日、くたくたになって体は綿のように疲れ切ってしまうのでした。

宿直の日といえば、夕方に申し送りを受けてから翌朝まで、一睡もせずに負傷兵の世話に飛び回らなければなりません。大小便の世話やその処理一つにしても、百十人分となれば三つや四つの石油缶はたちまちのうちに満タンになってしまうのです。それを二人で屋外へ運び出さなくてはなりません。まさに目の回る忙しさの中で、苦痛・激痛を訴える患者は間断なく、一時たりとも休むことは許されません。あっちで「ウオーッ」と激痛を訴える叫び、こっちでは「水をくれーっ」と喉の渴きを訴える声——そのたびに飛んで行っては要求に応えてやり、病棟内を夜を徹

して走り回っていなければならないのです。負傷兵と一体となった血みどろの戦いで、そこには微塵の私心もありませんでした。一刻も早く治療を！一刻も早く苦しみを除いてやりたい！と、私達の脳裏には兵士のことしかなく献身的に尽くしてまいりました。

しかし、患者の生命が維持されているうちは、私達の気持ちに張りもありキビキビと行動できるのですが、患者の死に水をとる時ほど辛いことはありませんでした。激しい戦闘があった時などは、昼夜の区別なく負傷兵が死亡して、私達の胸に一抹の悲哀が込み上げてくるのです。

ことに、真夜中に死亡者が出た時の辛さは他にたとえようがありません。死者が出た場合、まず軍医に報告してから、救護看護婦二人で戦死者の体を消毒し、真新しい病衣に着替えさせて霊安室に運ぶのです。霊安室への道は遠く、深い静寂の包む広い庭を踏みしめながら遺体を運ぶのです。聞こえるものは、ジャリを踏みしめていく自分達の足音だけです。切々と迫る悲哀は平常な人間の感覚を呼び覚まさずにはおきません。そして、真夜中に煌々と冴え返る月光を浴びて、二人で遺体を運んでいると、言いようのない恐怖におそわれ、全身総毛立たせてしまうのです。

——私は、ここで無数の兵士の死を見つめさせられました。そのほとんどの兵士のいまわの一言が「かあさん！」であったことも、ほとんど自然の叫びのように耳にこびりついています。（『かあさん！』）と言って死んでいく兵士のいまわの一言を内地の母親が聞いたとしたら、どんなに切ない思いを